

## 梗概

本研究では、「狩猟採集社会における土器の出現」をキーワードに、極東地域の諸問題をヨーロッパ側から見直すことを目指した。とりわけバルト海の沿岸地域に焦点を合わせて、北ドイツのキール大学およびベルリン自由大学を拠点に比較研究を進めると同時に、各地の研究機関を訪問して資料調査および学術交流を進めた。これらを通じて、極東地域における土器出現なる問題を、ユーラシア東端の局地的な現象ではなく、汎ユーラシア的な視点から再評価することが可能になった。

## 研究計画・目的

人類史における土器の出現をめぐっては、定着性の高い農耕社会と関連付けて理解されてきた歴史がある。重量が大きく破損しやすい土器は、移動性の高い狩猟採集社会には適合しにくいいため、上記の言説は長らく定説であり続けてきた。しかしながら、世界の各地で調査が進むにつれて、このようなモデルが成立し得ない点は、今日では共通の理解となっている。極東地域を代表例に、狩猟採集民が土器の誕生に大きく貢献している点は、もはや動かしがたい事実となっている。

こうした背景を踏まえて、筆者は「狩猟採集社会における土器の誕生」をキーワードに、その比較研究に取り組むことにした。昨今では、土器生産の技術は日本列島を含めた極東地域でいち早く出現し、ユーラシア大陸北部のステップ地帯を西側に向けて拡散し、バルト海沿岸を含めた北ヨーロッパへ到達した可能性が指摘されている。筆者は、これまで極東地域に焦点を合わせて同様の課題に取り組んできたが、それをヨーロッパ側から逆向きに眺める試みと言っても良い。

このような比較研究にあたって、筆者は土器そのものの精緻な分析に留まらず、それらを生み出した社会的文脈のなかで評価することを目指した。土器作りの変遷や技術を丁寧に整理すると同時に、環境変化や生業基盤、さらには移動形態といった文脈のもとで理解する試みである。こうした視点を採用することで、時間的にも空間的にも隔たった現象を共通の土俵で評価することが出来る。結果的には、極東地域における土器出現を世界的な視野のもとに位置づけ直すことも可能となる。

## 研究活動

2023年5月～同9月は、キール大学（Christian-Albrechts-Universität zu Kiel）の先史・原史学研究所（Institut für Ur- und Frühgeschichte）を拠点に研究を進めた。現在のデンマークや北ドイツを中心とするバルト海の沿岸には、中石器時代のエルテベレ文化が展開することが長らく知られてきた。シュレスヴィヒに所在するバルト・スカンジナビア考古学センター（Zentrum für Baltische und Skandinavische Archäologie）との連携関係も活かしながら、上記の課題に取り組んだ。

また、2023年9月～2024年3月は、ベルリン自由大学（Freie Universität Berlin）の先史考古学研究所（Institut für Prähistorische Archäologie）に拠点を移して、上記の研究を継続した。近隣に所在するドイツ考古学研究所（Deutsches Archäologisches Institut）を含めて、ヨーロッパのみならずユーラシア大陸へと広く視野が開かれている点に特徴がある。これら

の特性を活かして、バルト海沿岸のナルヴァ文化や櫛目文土器文化はもとより、北アフリカも視野に入れた比較研究を進めた。

これと並行して、上記機関に所属する研究者のネットワークを起点として、ヨーロッパの研究者と積極的な学術交流を目指した。ドイツに留まらず、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ラトビア、チェコなどの研究機関を頻繁に訪問し、当地の研究者と意見交換の機会を数多く設けることで、最新の知見や視点の把握に努めた。あわせて極東地域における最新の成果を紹介することを通じて、それぞれが取り組む地域を越えて、土器出現なる問題を共通して掘り下げることを目指した。

## 研究成果

これらの試みを通じて、豊富な有機質資料を交えた多角的な研究を経験できたのは、実に有意義な機会であった。筆者が重点を置いている日本列島では、過去半世紀以上にわたる行政的な発掘調査を通じて、世界的に見ても有数の資料が蓄積されている。それらに基づく詳細な研究は大きな財産に他ならないが、その一方で有機質の資料に恵まれない点に弱点がある。この点において、豊富な低湿地遺跡を有するバルト海沿岸の資料群は、研究の視野を大きく広げることに寄与した。

また、極東地域における研究成果を報告する機会を得られたことで、ヨーロッパ研究者の日本考古学に対する関心に応えとともに、これまでの成果を新たな視点で位置づけ直すことが出来た。上記機関では“The First Potter in the Far East”と題する連続講義を実施する機会を与えられたが、これを通じて、日本考古学とは異なる観点からフィードバックを受けることが出来た。このことは、極東地域の学術成果を汎ユーラシア的な文脈のなかで位置づけ直すうえで、実に有益であった。

これに加えて、ヨーロッパ考古学との学術的ネットワークを深められた点は、これから新たな研究を切り拓いてゆくうえで、実に意義深い試みであった。上述の如く各地の研究者を訪問し、双方の研究と資料をプレゼンし合い、また意見を交換することによって、相互に知見を深め合うことが出来た。狩猟採集社会における土器の出現をめぐる、幾つもの共通性の高い事象を確認し合うと同時に、方法論的な課題と可能性を共有できた点は、グローバルな議論の構築に向けて意味深い機会であった。

## 今後の展望

こうした比較研究の成果を相互の研究に活かしてゆき、極東地域の研究にフィードバックしてゆくことが最大の目標である。とくに日本考古学では、ともすれば編年研究に偏重するあまり、それらを世界的な関心のなかに位置づける試みが欠けていた点に問題がある。これまでの着実な蓄積を貴重な財産として活かしながらも、同時にアフロ・ユーラシア大陸に開かれた興味関心のなかに位置づけ、より俯瞰的な視点から議論を展開してゆくことが次なる目標である。

こうした目標のもとに、今回の在外研究の成果を英文の著作として公刊してゆくことを直近の目標として設定している。上記の連続講義を通じて、極東地域における土器の誕生をめぐる、筆者なりの枠組みを構築ことが出来た。また、ヨーロッパ考古学者との学術交流を

通じて、数多くのフィードバックを受けることが出来た。これらの蓄積を土台として、英文でモノグラフを刊行することで、過年度の成果を世界に向けて具体的に発信してゆく予定である。

なお、今回の在外研究を通じて開拓された学術ネットワークは、筆者自身の貴重な財産であることはもちろんであるが、同時に日本国内の研究者にとっても貴重と考えている。次年度以降も定期的に現地の訪問を繰り返して、こうした学術交流を継続的に深めることは言うまでもないが、ゆくゆくは外国人研究者の日本への招致をも視野に入れている。こうした試みを通じて、個人レベルの学術交流に留まることなく、より幅広いネットワークの構築を目指すことにしたい。

#### 教育等への効果

今回の在外研究で得た経験や知識は、今後の教育においても重要な資産と考えている。ヨーロッパ考古学の現場に深く携わったことで、これまで以上に多様な視点や考え方を学生と共有することが可能になる。考古学の方法論や考古科学との連携も含めて、今後の教育の質的向上に貢献可能である。さらに、現地の研究者とのネットワーク構築を通じて、国際的な交流や協力の可能性が広がった。これは、将来的な学生の留学やキャリアの支援にも役立つものであると確信している。

こうした教育的な効果に加えて、ヨーロッパにおける研究組織の運営方法に直接触れることが出来たのは、大きな成果であった。とくにキール大学では、Cluster of Excellence (ROOTS) や共同研究センター (SFB) (Scales of Transformation) を含めた大型研究が同時並行で進行していた。複数の学術領域が連動し、構成員が100名を優に超える研究プロジェクトの実際に触れることが出来たのは、今後の日本国内の研究の進め方を模索するうえで実に参考になった。

とりわけ興味深いのは、これらの大型研究は次世代の研究者の育成と密接に連動している点である。世界各地の研究者とのネットワークが構築されると同時に、若手研究者が実践的に研究の運営が出来る点、さらには複数の機関の連携を通じた人材育成が進められている点は、今後の組織運営を模索するうえで、大いに参考にすべき知見であった。既存の大学運営の在り方を見直し、新たな可能性を模索してゆくうえで、将来に向けた指針を得ることが出来たと信じている。